

辻村深月の初期作品における「山梨」について

On the Representation of “Yamanashi” in Tsujimura Mizuki’s Early Work

古川 裕 佳
FURUKAWA Yuka

辻村深月は山梨県出身の直木賞作家である。略歴を記すと、一九八〇年笛吹市に生まれ、山梨学院附属高校を経て、千葉大学に進学・卒業したのち、地元に戻って働きながら執筆を続け、二〇〇四年に高校生の頃から書きためていた長篇『冷たい校舎の時は止まる』でメフィスト賞を受賞し、デビューした。二〇一二年には『鍵のない夢を見る』(二〇一二年、文藝春秋)で直木賞を受賞し、その後も旺盛な執筆活動を続ける人気作家である。

論者は、二〇一五年に本学の企画「文大名画座」で『ツナグ』を上映し、辻村氏をお招きしてトークイベント行った際、インタビュー役をさせていただいたことがある。二〇一九年には、論文「弱さと幼さと未熟さと——辻村深月「君本家の誘拐」『冷たい校舎の時は止まる』——」(『ケアを描く』所収)において、辻村の初期作品における、「未熟」な人間同士の関わりとその可能性について論

じた。その後、山梨文芸協会の記念講演において「辻村深月と山梨」(二〇一九・六・三〇、於山梨県立文学館)という題でお話させていただいた。③ こうして辻村深月作品を読んできて気づいたのは、辻村作品の舞台となる地方都市には、東京ではない「地方」として普遍化される要素と、一方、現代の「山梨」らしき、山梨独特の地域性を投影している部分とがあることである。本稿では、辻村深月の初期作品を中心に取り上げ、「山梨」という土地や「地方」の問題がどのように描かれているかを検討し、物語の場所としての「山梨」の意義を見いだしたい。

まず本稿で取り上げる「初期」について、その範囲を確定しておくべきだろう。そもそも旺盛に創作活動をしている現代作家の作品史において、何ををもって「初期」とするかは難しい。その作品史は常に更新中だからである。例えば、作家デビューから八年後の直木

賞受賞に際して、批評家の瀧井朝世⁴は、作品史を振り返りながら、「思春期の切なさや息苦しさ」によって「若い読者に共感され支持されてきた」として、『名前探しの放課後』(二〇〇七)までを初期と定義している。その上で、三十代の登場人物の内面をえぐった『太陽の坐る場所』を転換点として、「思春期の閉塞感という出発点は変わらないまま、著者自身の成長に合わせてフィールドが広がっている」と述べている。その後の作品史に照らしても、おおむねこの読みは炯眼と言えよう。しかし当然のことながら、文壇に登場してから一五年以上が経過した今、別な方向で「初期」を見直すことも可能であろう。その物差しとして、「山梨」や「地方」というテーマに注目してみたいのである。

実は辻村深月作品で明確にその舞台を「山梨」としているものは多くない。デビュー作の『冷たい校舎の時は止まる』には「山梨」という文字がなく、また、直木賞にノミネートされ、受賞しなかった作品『オーダーメイド殺人クラブ』などは、舞台として「長野県上田市」を明示している。直木賞受賞作『鍵のない夢を見る』においても、東京周辺の大都市に暮らす女性たちを取り上げながら、「山梨」という地名には言及していないのである。地方を描きながら、その舞台を「山梨」に限定されないようにしているようにも読めるのだ。そこには「地方」を描くことへのこだわりと、ある種の「山梨」ばなれ意識があったのかもしれない。

辻村深月自身は、直木賞受賞の際に、地方出身の作家として、「地方の女性」の現在・リアルを切り取ったことが評価されたこと⁵をふまえて、島本理生との対談「母になって、得たもの」(『新刊展望』二〇一三・八)で、直木賞によって「これでもう地方都市の閉塞感と

は闘わなくていい、今までの闘いがある種報われたような気がして」と述べている。実際には、その後も、「地方」の自意識を小説的主題として繰り返し用いており、最近の作品『傲慢と善良』(二〇一九)でも、栃木県から東京に出て婚活する女性を主人公として、地方意識を主題としたことで話題になった。

では、辻村深月作品に表れる「地方」意識と、作家の出身地である「山梨」との関係はどのようなもののだろうか。辻村作品における「山梨」とは「地方」ということばに収まるような場所なのか、それとも独特の意味を持つ場所なのだろうか。

「山梨」を描くといっても、歴史・地理・名産・加えて社会、様々な切り口があり得るのだが、結論を先取りしてしまえば、辻村の「山梨」はそうした分かりやすい「山梨」ではない。あえて言うならば、武田信玄のいない「山梨」であり、また、世界遺産としての富士山も、リニアもない「山梨」、ワイン県を標榜もしない、観光ガイド的ではない「山梨」なのである。われわれはそこにむしろ現代の、新たな「山梨」を切り取ってみせようという意欲を読み取るべきかもしれない。独特な場所として描くか、それとも郊外化する地方として捉えるか、それはまさに現代の「山梨」の問題に通底しているからだ。本稿では、辻村深月の作品史において、直木賞受賞前後に、「山梨」や「地方」を描くというテーマが一つのピークを迎えることに注目し、そこまでを初期として、新しい「山梨」の描き方を検証してみたい。

一、作品史

確認した辻村深月の初期作品は次の通りである。直木賞受賞までに単行本化された順にリスト化し、初収録の情報を記してある。底本については論文末尾にまとめた。

- 『冷たい校舎の時は止まる』二〇〇四年六月―八月（上・中・下）、講談社ノベルス★
- 『子どもたちは夜と遊ぶ』二〇〇五年五月（上・下）、講談社ノベルス
- 『凍りのくじら』二〇〇五年一月、講談社ノベルス★
- 『ぼくのメジャースプーン』二〇〇六年四月、講談社ノベルス★
- 『スロウハイツの神様』二〇〇七年一月（上・下）、講談社ノベルス★
- 『名前探しの放課後』二〇〇七年二月（上・下）、講談社
- 『ロードムービー』二〇〇八年一月、講談社★
- 『太陽の坐る場所』二〇〇八年二月、文藝春秋★
- 『ふちなしのかがみ』二〇〇九年六月、角川書店
- 『ゼロ、ハチ、ゼロ、ナナ。』二〇〇九年九月、講談社★
- 『V.T.R.』二〇一〇年二月、講談社ノベルス
- 『光待つ場所へ』二〇一〇年六月、講談社
- 『ツナグ』二〇一〇年一月、新潮社
- 『本日は大安なり』二〇一一年二月、角川書店
- 『オーダーメイド殺人クラブ』二〇一一年五月、集英社
- 『水底フェスタ』二〇一一年八月、文藝春秋★
- 『サクラ咲く』二〇一二年三月、光文社

『鍵のない夢を見る』二〇一二年五月、文藝春秋★

以上、一八冊の単行本に収められた作品のうち、「山梨」もしくは「地方」ということをテーマに含む注目すべきものとして、考察の対象とした作品に★を付した。もちろん、この印を付したものの以外からも山梨や地方の問題性を読み出すことは可能ではあるが、次章からは★に絞って見ることにしたい。また以降で、ミステリ要素を含む作品について論じる際に、作品の結末や謎、トリックに触れてしまう可能性があることを、未読の読者にはお断りしておく。

二、〈無名の県〉と「都」の関係——『冷たい校舎の時は止まる』から『ぼくのメジャースプーン』まで

二〇〇四年のデビュー作『冷たい校舎の時は止まる』は、「ホスト」という存在の力によって、雪に閉ざされた校舎に八人の高校三年生が閉じ込められ、一人ずつマネキン人形に変容させられてゆくという、ミステリとSFの要素を含んだ設定になっている。舞台は、某「県」―S市の私立の名門校（青南学院）である。豪雪地帯ではなく、大雪が降るのは数年に一度くらい地域であるらしい。成績の良い生徒たちは進学先として、県内の大学よりも、都内の大学を目指す方が一般的であり、例外として京都の大学に進学する者がいる、という地域性も読み取れる。作品の舞台を山梨県と名指してしまいたくなるのは、作者の出身地（山梨県甲州市）を知っており、出身校（山梨学院附属高校）を知っているからこそであろう。しかし実は作中には「山梨」を名指す記号はないのである。

主要登場人物の一人、主人公たちの担任教師菅原榎の経歴の説明

が興味深い。

そして榊は、自分たちの今通うここ、青南学院高校の卒業生だ。この県下では一番の進学校だとされるここに当時のトップの成績で合格した。(略)

その後、榊は都内の有名私大を総なめに受かったものの、国立を目指すためにとそれを端から蹴って回った後、結局「浪人の最中に遊んでしまい、学力が落ちた」と一年前に合格した私大よりワンランク下の私大に入学、卒業した。(第二章)

この引用からは「県」の高校生たちがまず「都内」を目指していることが分かるだろう。この地方の高校生たちは、進学をきっかけに地元を離れることを当然としている。逆に言えば、地方においては、高校までが一番地元との紐帯が強いということでもある。青春という時代を生きる者たちは、子供であるがゆえに地元・地域性というものに縛られている。どこの中学で、どこの高校に進学するか、どこで暮らすかを自由に選択できないからである。

こうした問題意識はのちに『名前探しの放課後』、『オーダーメイド殺人クラブ』などに、よりはっきりと主題化されることになる。しかし、出発期の作品では、地方に縛られていることへの言及はそれほど多くない。東京という場所、文化の中心に対抗意識を持つ様子もない。若い登場人物たちにとって今いる「県」は、いつか出て行く場所であり、「都内」は必然的な行き先であるかのようだ。

二〇〇五年の『子どもたちは夜と遊ぶ』は、やはり「都内」からほど近い「県」にある国立大学(D大学)に通う大学生と大学院生たちが、童謡をアレンジした見立て殺人事件に、被害者として、また、加害者として巻き込まれてゆく物語である。殺人事件の現場と

して、群馬や埼玉の実在の地名が用いられており、登場人物がアルバイトや遊びに行く先として「都内」も身近なようだが、主たる登場人物が過ごすのはその少し外側のどこか無名の土地なのである。また、同年刊行された『凍りのくじら』⁹⁾は、孤独感を抱えた女子高校生が、家族の不幸や恋人の人格崩壊を前に苦しみながら、ドラえもんの秘密道具によつて救われようとするSF的な要素を持つ物語である。「海がない」「地方都市」を舞台としており、その隣県には海があり、買物のために「東京」に行くことができるといった条件から、山梨県に重ねて読みたくなるが、やはり明確な地名への言及はない。これらの作品は明らかに舞台となる「県」を具体的に名指すことを避けているのだ。

上記の作品世界の登場人物を使って書かれた、二〇〇六年の『ぼくのメジャースプーン』には舞台設定について興味深い問題があるので確認したい。ストーリーは以下のようなものだ。ある県の小学校で飼育小屋のウサギが虐殺されるといふ事件が起こる。「都内に住む医大生」の男が悪意をもって、飼育当番の女子児童(『凍りのくじら』の「ふみちゃん」)にそれを見せつけ、その様子をネットに公開したため、その子はことばを失ってしまったのである。実は、その同級生である主人公の「ぼく」は、相手の心を縛ることができると特殊な言語能力——相手にある条件を提示するとそれをかなえようとしていける能力——を持っていた。自分でもまだ使いこなせていないその力を使って犯人に復讐するか、徹底的に反省させるかで悩み、どのような呪いの言葉をささやくべきか、親戚の大学教授(『子どもたちは夜と遊ぶ』の秋山一樹||秋先生)に相談に行く、という物語である。この言語能力というのはかなり複雑なS

F的設定であり、悪意をめぐって言葉で戦うという展開を読み解くのもとても面白い論点となるのだが、本稿ではそれはおいて、舞台の設定に注目したい。

ウサギ殺しの犯人は「都内」からわざわざやってきたのであるが、それは主人公の小学校のウサギの飼育小屋の話題が、「地元」のテレビ局ではなく、「日本全国」の「朝のニュース番組」で放送されたためである。舞台は明らかに都内近郊のどこかの「県」である。ところで、犯人と対面する前日に、主人公が秋先生と、それから『子どもたちは夜と遊ぶ』の登場人物たちに誘われて動物園に行くというエピソードがある。電車ですれほど遠くないところあるその動物園にはパンダがいることになっている。パンダのいる動物園を東京の上野動物園だとすると、では、主人公のいる「県」はどこになるのだろうか。主人公と「ふみちゃん」は二人で電車で動物園まで行き、大人たちと現地集合している。「ふみちゃん」は『凍りのくじら』にも登場するので、海のない、東京ではない「県」の住人であるはずだ。だとするとこの「県」はますます不思議な場所となる。つまりその「県」にパンダがいるのか、それともそこは上野動物園からそう遠くないということなのか。

登場人物に共通性があるこれらを連作と見るなら、主人公たちがいる「県」は、あえてかなり曖昧な場所として設定されている。都内にほど近い、〈無名の県〉。ここで注意しなければならないのは、これは設定の甘さの問題なのではなく、小説的必要性の問題だということだ。『凍りのくじら』などは山梨と言ってしまったても良いのに、むしろ具体的な地名に縛られることを避ける。一方、『ぼくのメジャースプーン』では、動物園との関係からは東京都内に設定し

てしまう方が自然なのに、「地方」の「県」であることを強調してみせる。

そもそも出発期の作品においては、「都内」ということばは用いられるが、それを「東京」と名指すことすら避けているふしがある。主人公たちがいる〈無名の県〉と「都内」の関係を描くにあたって、中心的な都市と地方との距離感だけが必要とされていたということだ。それぞれ単純なりアリズムでは読めない設定を持っているがゆえ、抽象的な「県」の世界を用いているのではないだろうか。〈無名の県〉は地域性を必要としない物語において、中心ではない場所という意味で、特定されることなく浮遊する「地方」として設定されているのである。

『ぼくのメジャースプーン』に続く作品『スロウハイツの神様』は、明確に東京の地名を用いた東京の小説として書かれているものの、登場人物たちは東京という場所にコンプレックスや憧れを抱いてはいない。そこは地方出身者の集まる、文化の中心であるということの方が重視されている。こうした作品では東京もまたさほどの意味を持たない東京であったのだ。

三、〈無名の県〉が着地する、架空の、しかし、具体的な場所——『名前探しの放課後』

前章で、出発期の作品においては、現実の土地に結びつけがたい〈無名の県〉が設定されており、そこは都内ではないという程度の抽象的な場所であったことを確認した。その後、『冷たい校舎の時は停まる』の後日談『ロードムービー』や、『ぼくのメジャースプーン』の後日談的要素を持つ『名前探しの放課後』においては、東京

の東京性、地方の地方性を具体的に意識した作品が書かれるようになってゆく。これまでの作品と共通する登場人物を使いながらも、浮遊する〈無名の県〉には名前が与えられ、どこかの具体的な場所に着地することになるのだ。本章では、『名前探しの放課後』という具体的な名前を持つ場所、具体的な舞台設定のある物語を検討してゆく。

二〇〇七年の『名前探しの放課後』は、数ヶ月先の時間からタイムスリップしてきたという高校生の依田いつかが、クラスメイトたちと協力して、同じ学年から出るはずの自殺者を探し出し、それを阻止して未来を変えようとする物語である。仲間の高校生として『ぼくのメジャースプーン』の「ぼく」と「ふみちゃん」が登場するのだが、彼らの地元の「江布県」について、非常に具体的な地名と設定が施されていることが興味深い。

主人公たちの通う「藤見高校」は県庁所在地「江布」市にあり、県内各地から生徒が集まる学校である。しかし依田いつかとクラスメイトの坂崎あすなが住んでいるのは、そこから電車で一時間近くかかる「不二芳」市で、そこは「霊峰」として名高い「山」の見える観光地とされている。

昼間であれば駅とジャスコと市役所と、それから地元観光の目玉である、絶叫マシンが売りの遊園地とを繋いだ無料パスが運行しているのだが、今の時間はそれがもう終わっている。

(第二章)

いつかの住む江布県は、周りを山に囲まれた地形のせいとか、東京と隣接しているにもかかわらず、近県に比べて都市化が進行しなかった土地だ。つまり、都市部に近すぎず遠すぎず、け

れど「田舎」を築しむのであれば、という観光地。普段首都圏に住んでいる人たちが週末だけを往復するのにもうってつけ。

(第三章)

富士山の麓で、富士急ハイランドのある富士吉田市に「不二芳」、県庁所在地の甲府に「江布」、だから「江布」県も山梨県として読めそうに思われる。ただしここでは少しだけ気をつけておきたいことがある。それはこの町の鉄道事情と位置関係である。

あすなたちの学校は、市内の外れにある。中心の江布駅なら特急も停車するが、藤見（高校に稿者注）の最寄駅は江布駅の次、南江布駅だ。

南江布駅に停車する電車はだいたい下りも上りも二十分間隔。その上、不二芳まで出ている電車はさらに少ない。たいがい途中の駅で止まってしまい、特急も停車しない。

(中略)

南江布の駅に着くと、次に不二芳まで行く電車にはまだ三分近くあった。

その一本前の電車は、途中の駅が終点だ。そこから不二芳まで行く電車の始発と接続するが、できることなら、座ったまま一本で帰りたいかった。

(第二章)

これだけを読むと、「江布」、「南江布」と「不二芳」市は不便ながらも電車一本でつながっているようだが、実際の山梨県の鉄道事情とは合致しない。現実では、南甲府はJR身延線の駅であり、富士吉田に行くには、身延線から甲府駅でJR中央線に乗り換え、大月駅まで行ってから富士急行に乗り換えて富士山駅まで行かなければならないからだ。山梨県は二〇〇六年より高校の学区制を廃止、

全県一学区としているが、実際には富士吉田から甲府まで手間と時間をかけて通学する高校生はほとんどいない。

とはいえこうした現実の鉄道事情との齟齬はもちろんミスではない。登場人物の一人の河野基は鉄道マニアであり、作品の後半で、いつかとあすなと基が、不二芳から「鈍行」の直通で「東京駅」へ出かけ、そこから「やまびこ」に乗って、「福島駅」まで、新幹線の連結を見にゆくという小旅行のエピソードがある。この小旅行についての記述の細かさと言い、作品の最後に鉄道マニアのマニアぶりが小道具として非常に役に立つ設定が用意されていることとい、この物語独自の鉄道事情には小説的工夫が凝らされている。

この物語においては、東京の近郊の「江布」県で、不二芳と江布が一時間程度の距離感で繋がっていることが必要だった。一方、事実としてはよく知られていることだが、山梨は大きく二つの地域文化圏に分かれている。甲府は国中（くになか）地域、富士吉田は郡内（ぐんない）地域であり、その二つの地域は距離的にも、鉄道でも隔てられており、移動には車を使った方が早いほどである。ならば『名前探しの放課後』の世界では、身延線を富士吉田方面まで延伸する架空の路線を創造したのかもしれない。（無名の県）であったものを現実の山梨に近づけながら、架空の「江布」県として、あり得たかもしれないもう一つの山梨へと変容させたのだ。それは国中の中心と郡内のまちを鉄道一本で結ぶという、現実の山梨にはない地理変化がなされた、いわばパラレルワールドなのである。

では、不二芳と江布を隔てることなくつなぐことによって、何が可能になるのだろうか。その意味は何だろう。それは国中も郡内もない世界を描きだすための一つの工夫だったのではないか。この作品

では、地元で暮らす高校生の視点を使いながら、地方自治体の悩みを背景に描きこんでいる。

「田舎って車社会だからさ。バカでかい駐車場のあるそういう店が重宝されるんだよね。でそこがあると賑わうし、企業から入る税金も魅力的だからっているんな自治体が今、誘致の努力をしているみたいだけど、その一方でさびれゆく商店街、さびれゆく駅前。さらに進む車社会、発達しない公共交通機関、特に鉄道。そしてそのうち、にもかかわらずメガモール自体の集客力が落ちてきて、そこが撤退する時には、田舎にはもう何も残っていないってことになる」
（第五章）

ここでメガモールと呼ばれているのは「ジャスコ」であるが、現実の山梨においてはジャスコ問題、メガモール問題で話題になったのは甲府昭和である。つまりこれは国中地域の抱える問題なのである。

一方、第七章で語られる、デジタルテレビ問題、過疎問題と観光地問題はたしかに郡内の問題により近い。

「人口を増やしたい、発展したいと思ってるなら、通信と情報基盤整備は絶対にやらなきゃ駄目だ」
（略）

「いつか。『限界集落』って言葉聞いたことある？」

「限界——何、それ？」

「過疎化と高齢化が進んで、社会活動が自分たちの共同体だけじゃもう維持できなくなった地域を指してそう呼ぶ」

（第七章）

不二芳は現実の富士吉田とは異なり、メガモール問題と地方消滅

問題を同時に抱えていることになっている。不二芳の高校生が江布に通うという設定、すなわち、県内の商業圏・文化圏としての中心地と、観光地とを繋ぐことの意味はここにあるのではないか。「江布」県自体が東京方面からの移住者や観光客に期待・依存している状況にあること、県の中心としての江布の外側には東京があり、県の外れの観光地の不二芳にはモールと過疎とインフラの問題があること。そもそも、SFというジャンルでは非現実的な状況を描き出すために、設定をより詳細に描き込む傾向がある。この作品は現実的に似せた具体的な地名を作り出し、リアリズムを装いながら、SF的に地理を改変する。架空の鉄道・地誌を創造し、山梨県の抱える二つの問題をまとめて描き出す試みであった。

四、具体化する東京と、そこからの距離で規定される地方——『太陽の坐る場所』『ロードムービー』

前章では、山梨をSF的にパラレルワールド化することと、それによって〈無名の県〉が具体的な場所に着地する様子を併せて検討した。次に考えたいのは、やはり東京との距離感によって規定されるという形で、具体性を獲得する「地方」の姿である。

まずは二〇〇八年の『太陽の坐る場所』を見てみよう。物語は「F県」の高校の同窓会から始まる。登場人物は三〇歳手前であり、大学卒業後数年たち、東京、地元との関わり方による差異が明らかになってくる年頃とされている。地元の実家から一度も離れたことのない者。大学で東京に出て行った者、そのうちまだ東京に居る者、ふたたび地元に戻った者。予想以上の出世を遂げた女優「キョウコ」を同窓会に引っぱり出そうと、野次馬的な関心や自己顕示欲を秘め

た元クラスメイトたちが動き出す。次第に地元の高校にいた頃の自分と現在の姿の差にコンプレックスを刺激され、彼らの心の奥底が暴かれてゆくというストーリーである。

冒頭の同窓会は東京組の参加を促すために、珍しく東京で開催されたものである。いつも同窓会の中心となっているのも東京組だからだ。

F県は東京と隣接していることもあり、かつてのクラスメートの大部分が高校卒業と同時に進学や就職のため東京に出た。そんな自分たちのクラス会は、学生時代に都内にいる人間だけで何となく集まっていたものが、就職を機会に地元に戻った人間に配慮するようになり、社会人になってからは今回のようにきつちりとハガキを出して参加を呼びかける本格的なスタイルになった。

(出席番号二十二番)

しかし、結局東京組と地元組は何となく分かれてしまう。「聡美だつて感じることはない？ 田舎に残った子たちの、東京に出てった人間に対する劣等感ってすごいよね。別にこっちは何も思っていないのに、何かっていうと自分が田舎に残ったのは仕方なかったって話始めたり、かと思うと、自分の旦那とか彼氏の自慢話。(以下略)」

(出席番号二十二番)

これは水上由希という、東京でアパレル関係の会社に勤務する登場人物の台詞であるが、彼ら東京組を自認する者たちは多かれ少なかれこうした自意識で地元組と自分たちを差異化し、そこにプライドをかけている。しかし、その裏にあるのは、そのような差異によつてしか、現在の自己を規定できないという不安である。東京組の彼らは同窓会への参加を呼びかけようと「キョウコ」に一人ずつア

タックするのだが、そのプロセスにおいて高校時代の自分に照らした現在の自分の問題に直面させられる。自分自身のコンプレックスに手ひどくぶつかる羽目になるのだ。

わかってしまったのだ。

あそこがどうしようもないほどの、小物の集まりだということとを。皆が低い位置から、空に浮かぶ太陽か星を見上げるように彼女を見上げる。手に入るはずもないのに、その光を少しでも多く浴びようと必死なのだ。

（出席番号一番）

こうして「キョウコ」を同窓会に呼び出すグループの仲間たちは、逆に一人ずつ、その仲間と連絡を取ることをやめてゆく。「ミイラ取りがミイラになるように、引き籠ったキョウコに接触することで儀式を降りていく女たち」（出席番号二十七番）。記憶の亡霊を呼び出し、現在の自己と向き合わせたのち、一人ずつ同窓会の舞台から消してゆくというこの方法は、明らかに『冷たい校舎の時は止まる』の変奏である。

しかし、この作品では物語の最後に、東京組のコンプレックスやルサンチマンが、地元組のコンプレックスを動かし、衝突するという展開を見せる。作品冒頭の東京で開催された同窓会では「F県組の中心に座」っていた「地方テレビ局のアナウンサー」が、東京組から主催者を引き継ぎ、地元で同窓会を開くのである。「東京に住んでいるからという理由だけで鼻を高くするメンバーにだって、臆することは何もない。私はここで生きていく」と自分に言い聞かせる彼女は、しかし、地元や高校時代——恋愛やいじめの記憶なども含め——を忘れていない。むしろその頃の記憶の回想の描写は、他どの登場人物よりも鮮やかなほどだ。

作品のクライマックスでは、地元の最高ランクのホテルで開かれる同窓会に、とうとう女優の「キョウコ」が登場する。高校時代は「女王」とされていた主催者に対して、「キョウコ」は到着するなり歩み寄ってゆく。そして、高校時代のトラブルの相手の現在について語り、それらはすでに「終わったこと」であり、自分たちはみなもはや「気にしていない」、と何度も繰り返し説明してみせるのである。

『太陽の坐る場所』において、登場人物たちのコンプレックスは地方的自意識は、あくまでも東京や、「キョウコ」という中心との距離によって構成されている。換言すれば、中心との距離を測ることで自己を規定して生きる者たちを引きつける「キョウコ」とは、まさに自ら光源を持たない惑星を従える太陽なのである。「太陽はどこにあっても明るい」という、タイトルとも繋がる台詞を体现する「キョウコ」を置いてみると、地元組を否定しようとする東京組も、地元に残って過去を忘れずにいる者も、どちらも、地方的自意識から解放されてはいないことが明らかになってしまうのだ。

この『太陽の坐る場所』と同じ二〇〇八年に刊行された短編集『ロードムービー』¹⁵にも、やはり東京へのコンプレックスをテーマとした作品「トーキョー語り」が収録されている。

これはどこか地方都市のU市の近郊にある田舎を舞台にしている¹⁶。視点人物のさくらは「自分の半径数キロにしか関心がない」ような、地元充足思考の高校生である。彼女のクラスにある時、親の仕事の都合で引っ越しを繰り返している久住薫子が転校してくる。彼女は引っ越し当初に品川ナンバーの車に乗っていたことが目撃されており、以前は東京に住んでいたということでもクラスの人気者に

なるのだが、後にそれが嘘であることが明らかにになってしまふ。

「なんかさ。——急に、むなしくなっちゃったんだよね。東京から来たって言うのと、みんな、確かに優しくしてくれて、話聞きたがってくれるけど、結局そんなの、あんま意味ないのかもって」

薫子さんが苦笑いする。

「——東京の話をするまではね、私、転校初日にみんなの前で泣くことにしてたんだ。心細いつて話して、同情してもらって、友達になつてもらおう。毎回毎回、新しいところに行くたびに不安で、みんなの気が引きたくて。そういう、つまらないことしてた」

東京の話をするのと、泣いてみせることが並列される世界。田舎の高校のクラスの狭さと言ってしまうはそれまでだが、しかし、その狭さに生きる者にとっては有効な手段なのだ。

実は同じクラスには数年前、彼らが中学生だった頃に転校してきた「遠山さん」という女子がいて、当時電波も入らないような田舎だというのに、こそこそと携帯電話を持っている姿が批判されていた。

この外——おそらくは転校する前にいた学校の友達と繋がる方を優先して、その象徴としての携帯電話。現代っ子の依存症。遠山さんのそんなイメージが、みんなが繰り返す陰口の対象に挙げることで勝手に定着していった。

今生きている場所ではない「外側」の視点を持つことに対する反感と、先ほどのような、遠い場所としての東京に対する特別視は通底している。「東京」とは、その場所についての真偽のほども分か

らないほどの「外側」にあるのだ。しかし、高校生たちの中には、進学でそこを目指す者もあり、彼らにとっては「外を見てる」「遠山さん」は、憧れの対象ともなりうる。

一方で「外側」を志向しないさくらは、「遠山さん」に対しても久住薫子に対しても、過剰に憧れることもなく、攻撃的になることもない。「東京」という場所に違和感を抱いているからだ。「私は——、みんなと違って、東京のことほとんどわかんないし、何だか怖くて苦手なだけけど。でも、考えてみれば、東京って結局、日本の中で一つだけ違う場所でしょ?」。地方や田舎の高校生のメンタリティが、東京という基準との距離で規定されていることを相対化する、希有な感性の持ち主とも言えようか。この短編は地方の高校生の地元意識や東京意識、複数の価値観をあえて並列しているのだ。

『太陽の坐る場所』や「トーキョー語り」では、地方を規定するために「東京」という中心が必要とされている。二章に見たようなただの「都内」ではなく、明らかに意味を持つ場所となっているのである。

五、二つの方法——現代の「山梨」か地理改変された「山梨」か

前章では二〇〇八年の作品を取り上げ、〈無名の県〉が具体的な場所に着地したあとで、「都」が「東京」として意味を持つ様子を確認したが、それに続く二〇〇九年の『ゼロ、ハチ、ゼロ、ナナ』は「富士山」「山梨県甲州市」という具体的な山梨の地名を用いた作品である。

作中にはつきりと、「負け犬」問題ということばを使い、三〇歳前後の地方の女性たちの抱える焦燥感を描き出している。主人公の神宮司みずほは山梨県甲州市で育ち、大学で東京に進学し、卒業後一度親元に戻ってパラサイトシングル的な生活を送ったのち、結婚してふたたび東京で暮らすことになったという経歴の、三〇歳のフリーライターである。彼女の幼なじみ望月チエミが、自宅で母親を刺して行方不明になったという事件が起きる。みずほは友情と責任のような意識から、彼女の行方を捜そうとする。

地方の現代を生きる三〇代の女性の自意識に「山梨」という土地はどう関わっているのだろうか。作品の冒頭で事件を起こしてしまったチエミの視点から次のような富士山への言及がある。

玄関を開けたまま正面に顔を上げたら、富士山が見えた。
小さな頃から、ずっと見てきた景色だった。

(中略)

見上げる富士山の奥から、黄色い朝日がゆつくりと昇っていく。私が小学生の頃にできた、この街で一番高いビルの窓ガラスに、光が反射していく。

昔、あのタワーができたばかりの頃、初日の出をここから同じように眺めたとき、「チエ、早くお願いしなさい」と言われた。

前述したように辻村深月の初期作品では具体的な山梨県の地名や「富士山」への言及は少なく、『名前探しの放課後』では「霊峰」とぼかされていたほどだが、この作品では「富士山」の存在が明示されている。しかし、それはチエミにとつては願掛けのために使われる、一つの風景でしかないことに注意したい。また、「甲州市」や「塩

山市立塩山第三小学校」という具体的な地名もあるのだが、主人公のみずほにとつてはその場所は、そこから甲府の進学校に通い、そこから東京の大学へ進学するという形で、いわば出て行くための場所でしかなかったのである。

みずほはチエミの調査のために戻ってきて、改めて自分の「地元」を見直してゆく。そこで見いだされるのは、土地ではなく、人間である。それも結婚に焦る地方の女性たちのありようだ。みずほは地元に戻っていた頃の、「負け犬」時代の自分を回想する。

私の東京の友達、独身の子はほとんどが一人暮らしだが、地元ではパラサイトシングルすることが不可避の前提だった。彼女たちの人生プランは、誰かと結婚しなければ先に進むことがない。「自立」は、結婚して初めて実現する。(第一章)

地元の短大に進んで、地元の会社勤めるチエミを含む女友達グループはもちろん、東京の大学に出たみずほも、地元に戻れば、結婚するまでは〈母の娘〉に戻らざるを得ない。実家に戻って無償で暮らすことを、「不安がる母親のそばにただ「いる」ことを代償とした当然の対価」として捉え、それを「娘代」と名付けていたほどに当然のことなのだ。その後、みずほは兄の後輩と結婚してふたたび東京に出て行くのだが、チエミ以外の遊び友達を結婚式に招かなかったことで、地元の友人とは疎遠になってしまっていたのだ。

結婚しなければ親にも地域社会にも認められないという状況や、また、結婚式と招待客の数へのこだわりの強さなどに、民俗としての「山梨」が反映しているのかもしれない。だが、結婚しないと地元に向きがしにくいというのは、実は、「山梨」に限定されない、

非常に普遍的な「地方」のリアルであり、『傲慢と善良』も栃木県を舞台に同じ問題を描いている。逆説的だが、『ゼロ、ハチ、ゼロ、ナナ。』は具体的な「山梨」の地名に言及しながらも、現代のリアルを描くために固有の「山梨」性を薄めている。まさに「山梨」性の薄さによって現代の「山梨」のリアルを切り取ったと言えないだろうか。

この『ゼロ、ハチ、ゼロ、ナナ。』の方向性は、具体的な山梨の地名に言及しながらも、問題意識としては第四章のような東京との距離を引き継いでいると言えよう。一方、それとは別に、二〇一年の『水底フェスタ』には第三章のような、地理改変による山梨の描き方を見ることが出来る。

『水底フェスタ』は、山とロックフェスで有名な地方の村を舞台に、地方独立の理想を語ろうとする村長の息子・湧谷広海が主人公である。東京のゼネコンから資金を引き出し村おこししようとする村人たちや、村の一部をダムに売り払って得た後ろ暗い資金を元手に、不透明な村長選を続ける大人たちへの違和感を覚えた子どもたちの抵抗のドラマが描かれている。

その舞台は以下のように説明されている。「六ヶ岳郡睦ッ代村は県の最北にある六ヶ岳山麓に位置する」。「新幹線の停車駅や空港を有する県庁所在地へのアクセスも悪い」。一見、山梨の「八ヶ岳」を思わせる「六ヶ岳」であるが、現実の山梨の県庁所在地には新幹線の停車駅も空港もない。また、「睦ッ代村」には「平成の大合併」において、市に併合されることを拒否してあえて「村」であることを選んだというような具体的なエピソードがあるが、それは現実の八ヶ岳の実態とは異なっている。そして「山」で毎年行われるロッ

クフェスが「睦ッ代村」の売りになっているという設定も、一九九七年に一度だけ行われたフジロックの歴史を改変していると言えるだろう。こうして、地理改変と歴史改変によって「山梨」的な要素を用いつつ、地方の閉鎖性を撃つ物語を紡いでいるのである。

このパラレル世界の中の架空の村は、地方自治と地域経済の振興というユートピア性と、ダム建設と村長選挙をめぐるディストピア性を持っており、面白いテーマを含むのだが、本稿の趣旨を超えてしまうので、地理改変という手法が取られていることを指摘するに止めておくこととしたい。

以上のように、直木賞受賞までの作品系列には、現実の地名を使いながら、むしろそれがどこでもあり得る「地方」の問題に繋がるものと、地理改変や歴史改変を含みながら「山梨」的な要素を取り込んだものがあることが明らかになった。直木賞を受賞した二〇一二年の『鍵のない夢を見る』はまさに「地方」の女性を描いた短編集だが、架空の、しかし妙に具体的な地名を持ちながら、普遍化可能な「地方」が、東京をぐるりと囲む形でちりばめられている。

「仁志野町の泥棒」の舞台は、小学校が一クラスしかない田舎町であり、バスで一泊二日の「お伊勢参り」ツアーに行けるような場所となっている。「石路地区の放火」は、「横浜」に日帰りで行ける範囲の、「横浜」に憧れを感じるような地域を舞台にしている。「美弥谷団地の逃亡者」は、海のない田舎町から、「千葉・房総」方面に逃げる物語だ。

現実の地名を用いている「芹葉大学の殺人」は、群馬県高崎市出身の女性が、架空の「芹葉大学」に進学したのち、岩手県盛岡市で事件に巻き込まれるという形で、そこに東京という場所が全く出て

こない点が興味深い。続く「君本家の誘拐」も現実の地名を使っており、興味深い設定が施されている。

主人公君本良枝は静岡県出身で、大学で知り合った夫の学は茨城県出身であり、通勤と育児の便を考えて、埼玉の郊外にマンションを購入したという。関東近郊の、東京を中心とした大きな円の外側に、それぞれの実家を置いて、都会に暮らす核家族である。都内に通勤する夫の通勤時間が長くなってしまったために、主人公は自分の地元でもない郊外地域で孤独な子育てを強いられ、シヨッピングモールである事件に遭遇してしまう、という物語である。

それぞれの作品を詳細に論じている余裕がないのが残念であるが、舞台設定だけ確認しておく。最初の三つはどこかの海無し県であり、残りの実在地名の作品も、東京の周辺である。これまでに見た作品ほど強烈な東京コンプレックスは描かれぬが、しかし、そこをぐるりと囲む形で「地方」は存在感を示しているのである。明らかに「山梨」を舞台にしているものはない。しかし、別な見方をすれば、現代の「山梨」にも重ねうるものばかりだとも言えるのだ。

作者の辻村深月自身は『名前探しの放課後』について、「ジャスコみたいな大型店が中心になり多くの人がそこをコミュニケーションや情報の拠点にするという地方の生活空間って、山梨以外にも日本全国いたるところにある光景だと思っんです。読者の方には、自分がよく知っている自分と一番身近な街を想像して欲しいですね」と述べている（話題の著者に聞く 辻村深月『名前探しの放課後』『文蔵』二〇〇八・二）。まさにこの『鍵のない夢を見る』もまた、「いたるところにある光景」を描いたものと言えるだろう。それが地方の女性のリアルを捉えたとして評価され、受賞に至ったのであ

る。

さて、以上で辻村深月の初期作品と「地方」や「山梨」のあり方を確認してきた。初期の青春小説では、選べない地元からどこかに出ていこうとするとき、見いだされる地元と外側の問題を読み取り、それがいわば（無名の県）として設定されていることを確認した。その後、「東京」が具体的な意味を持つ場所となり、併せて、地方的な自意識が描かれるようになること、その過程で（無名の県）が架空の、しかし具体的な場所に落ち着く様を見ることができた。ここでは「山梨」の現実や現代に近いものが、地理改変というSF的手法によって物語要素に取り入れられていた。一方、具体的な「山梨」の地名を用いても、どこか普遍的な「地方」の問題系に触れるようになり、それが評価されて、直木賞受賞に至ったのである。

「山梨」の実在の地名を用いながら、現代のリアルを描き出すという課題。そこで見いだされるのは、東京ではないどこか、むしろどこにでもありうる、普遍的な「地方」像である。一方で、「山梨」の特異性を描くためにこそ、地理改変という方法が用いられる場合もある。だからこそ辻村深月の「山梨」は、武田信玄のいない山梨、富士山を中心としない山梨、リニアのない山梨、ワイン県でもない山梨となる。観光ガイドに収まらない、世界遺産の風景や過去の文化遺産に頼ることのない、現代の現実の「山梨」と言えよう。

今回取り上げた作品については、「地方」性や「山梨」という角度からもまた別の切り口からも、もつと掘り下げることとも可能であるが、今回は初期の流れを確認することにとどめた。それぞれの作品の主題についてはまた別稿に論じることとしたい。

※作品本文の引用に際して基本的にルビは省略した。参考資料の副題には省略したものもある。底本はできるだけ最新の本文を参照することとした。次に一覧で示した通りである。

- 『冷たい校舎の時は止まる』 限定愛蔵版、講談社、二〇一九年
- 『子どもたちは夜と遊ぶ 上・下』 講談社文庫、二〇〇八年
- 『凍りのくじら』 講談社文庫、二〇〇八年
- 『ぼくのメジャーズプーン』 講談社文庫、二〇〇九年
- 『名前探しの放課後 上・下』 講談社文庫、二〇一〇年
- 『ロードムービー』 講談社青い鳥文庫、二〇一三年
- 『太陽の坐る場所』 文春文庫、二〇一一年
- 『ゼロ、ハチ、ゼロ、ナナ。』 講談社文庫、二〇一二年
- 『水底フェスタ』 文春文庫、二〇一四年
- 『鍵のない夢を見る』 文春文庫、二〇一五年

※第三章に関して、山梨県の高校の学区制について、本学国文学科特任教授の小石川正文先生にご助言と資料提供をいただいた。また、現実の富士吉田と作中の「不二芳」のあり方については、富士吉田市役所の渡辺明日香氏（本学国文学科卒業生）に話を聞かせていただいた。心よりお礼申し上げます。

注

- 1 当日の様子については本学の『地域交流センター通信』（二七号、二〇一六・三）に報告をまとめた。また新聞記事「望むけど無理なこと 辻村さん「ツナグ」語る」（『山梨日日新聞』二〇一五・六・二八、文・宮川彩乃）にも紹介されている。
- 2 佐々木亜紀子・光石亜由美・米村みゆき編『ケアを描く 育児と介護の現代小説』（七月社、二〇一九）所収。
- 3 新聞記事「架空世界に山梨のリアル」（『山梨日日新聞』二〇一九・八・三、文・田辺彩子）に紹介されている。
- 4 瀧井朝世「辻村ワールドは進化を続ける」（『オール読物』二〇二二・九、直木賞特集号）
- 5 『オール読物』（二〇二二・九）掲載の直木賞「選評」では、桐野夏生、北方謙三、林真理子、阿刀田高が「地方」の閉塞感を取り上げたことに言及・評価しており、同号掲載の辻村深月と林真理子との受賞記念対談でも、山梨県出身者として「地方を書くこと」について語っている。辻村と林の「山梨」の比較というのも興味深いテーマであるが、別稿としたい。
- 6 瀬戸内海の島における青春を描いた「島はぼくらと」（二〇二三）の執筆経緯についての発言。ほかに、「話題の著者に聞く INTERVIEW 90 辻村深月」（『文蔵』二〇二三・九）でも、『ゼロ、ハチ、ゼロ、ナナ。』『水底フェスタ』『島はぼくらと』を地方の共同体を描いた三部作として位置づけている。
- 7 管見の限り、今回調査対象とした「初期」においては、富士山を「富

- 「土山」として描写するのは『ゼロ、ハチ、ゼロ、ナナ。』のみである。また武田信玄の名前は、「樹水の町」(『光待つ場所へ』講談社、二〇一〇)で、「敵に塩」という慣用句の説明として出てくるだけであり、とくに土地と結びつけられてはいない。
- 8 並行して連載された作品や、バラバラに短編として発表された作品などもあり、執筆時期を確定できないため、単行本の刊行順とした。
- 9 主人公の理帆子に通うのは「県内一の名門進学校F高」であるが、この「F」がその後の作品に登場する「F」県に關係しているかどうかは不明である。
- 10 相互に少しずつ登場人物を重ねてゆく「スターシステム」については作者自身が意識的であり、解説としては「辻村ワールドリンク集」(『野性時代』二〇〇九・八、「特集 鏡の中の辻村深月」)が参考になる。11 作中では「えふ」というルビがある。これはもちろんSFのエフであり、藤子・F・不二雄のエフであるが、コウフⅡ甲府とも読める。詳しくは三章で検討する。
- 12 山梨県の高等学校の入学制度については小石川正文教授よりご教示いただいた。
- 13 作品の末尾に地域研究の専門家である鈴木輝隆(江戸川大学、当時)に取材したと記されており、地方再生問題についてかなり入念に調査したことが分かる。
- 14 『名前探しの放課後』の登場人物たちが通っていたのは「江布」県立「藤見高校」であるが、この作品には「F県立藤見高校」とある。「江布県」Ⅱ「F県」という設定で読むこともできるかもしれないが、共通する登場人物がないため確証はない。
- 15 表題作の短編「ロードムービー」は「冷たい校舎の時は止まる」の登場人物を用いており、その十数年後の世界となっている。二人の登場人物が結婚したのち生まれた子供が、小学校の親友と家出をするという物語だが、彼らが住んでいるのは「F県」である。
- 「うん。俺、子どもだけでF県出るの初めてなんだ。トシちゃんは？」
「……何度もあるよ。そんなこと。当たり前じゃん」
- 家出の目的地は、F駅から東京方面行きのバスを途中下車して訪れるY県である。このF県が「太陽の坐る場所」の「F県」や「名前探しの放課後」の「江布」県と繋がっているのかは断定できない。
- 16 「冷たい校舎の時は止まる」の登場人物のその後を描いた「道の先」(『ロードムービー』収録)の登場人物のさらにその後を描いた作品である。

受領日 二〇二〇年一〇月一四日
受理日 二〇二〇年一月 四日

